

## 第 28 回大阪大学野田村サテライトセミナー 「写真のチカラ 写真返却活動から見てきたもの」

2015 年 6 月 11 日、大阪大学未来共生イノベーター博士課程プログラムのもと開設された「大阪大学野田村サテライト」にて、「第 28 回大阪大学野田村サテライトセミナー」を開催しました。今回は、震災直後から野田村の写真返却活動に携わっていらっしゃる外館真知子さんと浅田政志さんをお迎えして、写真返却活動や、そこでの野田村の方々との交流を通じて感じた写真のチカラとは、いったいどのようなものかというテーマでセミナーを行いました。

今回のセミナーには、野田村在住の方をはじめ多くの方が参加してくださいました。また、今回も、遠隔教育システムを使用して、大阪大学吹田キャンパス・大阪大学豊中キャンパスをつなぎ、三地点同時中継でセミナーを行い、大阪大学の教職員や学生とも交流を深めることができました。

セミナーは、外館さんと浅田さんの出会いの場面を語っていただくことから始まりました。浅田さんが「八戸レビュー」という写真集の取材のために、八戸に来た時に毎晩立ち寄っていたのが、外館さんが勤めていた飲食店でした。そして、東日本大震災が発災したとき、たまたま八戸にいた浅田さんがまず連絡をとったのが外館さんでした。その後、何かできることはないかと八戸から南下した際に驚いたのが、変わり果てた野田村の姿だったそうです。野田村で物資の仕分けボランティアを一日中行い、八戸に帰るというときに目にしたのが、役場前で写真を洗浄しているボランティアの姿でした。写真家である浅田さんは、その風景を「まさかこんな活動が起こり得るとは、思いもしなかった。真剣に作業している空間は、僕らにとっては、遠くで見ているしかないという感じ。でも興味はあったので、帰り際に声をかけてみました」と振り返りました。その時に、ある青年に「野田村の海、綺麗でしょう」と言われたことが、忘れられず、ボランティアに行くというよりも海を見に行こうと思い、次の日以降も野田村に通い続けたそうです。そうして、浅田さんが仕事の拠点としている東京へ戻った後も、外館さんはボランティアを続け、写真救済活動は、「チーム北リアス写真班」としてまとまっていきました。

次に、浅田さんから被災各地の写真返却活動の様子を報告していただきました。南三陸町の返却活動には、南三陸で何代も続いている写真店の店主が、自分の写真を探していました。「自分が撮った写真は、いくらでもあるんだけど」と言って探し続けます。ついに、ご自身のおじいさんの写真を見つけられ、いたく感動しておられたそうです。また、宮城県山元町の返却活動では、京都大学の学生が入り、町役場や企業との連携をとり、デジタル化に一番早く取り組んだり、顔認証システムを導入したりとほかの返却活動とは一味違う活動となっているようです。いずれにしても、返却活動を突き動かしているのは、返却

活動に携わる方々の熱い想いであるということを再認識させられました。

最後に、外館さんと浅田さんから、写真のチカラとは何かという問いに答えていただきました。外館さんは、「写真には、撮られた人の気持ちと撮った人の気持ちの両方がある。そういう想いに触れられるのが写真のチカラ」と答え、浅田さんは、「人間は、記憶なしでは生きていけない。その中でも、日常生活で使われる記憶と普段は思い出さないけど大切な記憶の二つがある。写真は、大切な記憶を思い出させてくれる。そして、人を笑顔にさせるチカラがあるのではないか」と答えてくださいました。

第28回大阪大学野田村サテライトセミナー「写真のチカラ 写真返却活動から見てきたもの」も盛況にうちに無事終了しました。次回セミナーは、7月11日に生涯学習センターで行う予定です。